

ティツィアーノ作ザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒの肖像画

―捕虜姿の肖像描写の歴史と古代凱旋行列の構成を模した武装肖像画連作の展示―

久保 佑馬（京都大学 日本学術振興会特別研究員 PD）

マルティン・ルターと親交が深く、ルーカス・クラナハ（父）の後援者としても知られるザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒ（1503～54年）は、2度ティツィアーノの肖像画のモデルとなっている。皇帝カール5世に対抗して、シュマルカルデン同盟を結成し、盟主の一人となった彼は、1547年のミュールベルクの戦いで皇帝軍に大敗を喫し、捕虜としてアウクスブルクまで連行された。ティツィアーノの肖像画2点は、画家がそのアウクスブルクを訪問した際（1548年、1550～51年）描いた作品である。ウィーン美術史美術館所蔵の1枚は、椅子に座る君主像という慣例的な肖像形式によるが、プラド美術館所蔵のもう1枚では、粗末な甲冑を纏った選帝侯が正面から捉えられ、左目下の傷から垂れる血は、あたかも涙を流しているかのようである。捕虜となった君侯が、時代遅れの甲冑を着せられ肖像画に描かれたという事例は、歴史的に見ても非常に稀で関心をそそられる。本発表では、なぜティツィアーノがこうした異例の肖像画を描くことになったのか、注文主カール5世の意図を読み取りながら、その図像伝統、制作背景を跡づけて議論する。

ティツィアーノはアウクスブルク滞在中、本作を含め、シュマルカルデン戦争参戦者たちの武装肖像画を10点以上、カール5世から受注した。それらはほぼ同寸で揃えられ、連作を構成していたと推定される。晩年のグンター・シュヴァイクハルトは、連作が古代凱旋行列を模して構想されたのではないかと仮説を立てたが、彼の死後、その仮説を裏づける考察は継承されてこなかった。本発表では、カルロ・リドルフィ『美術の驚異』（1648年）において、一連の肖像画が、ハプスブルク宮廷の一室で並べて展示されていたと記述があることに着目し、シュヴァイクハルトの説の妥当性を主張する。さらに周辺事例として、カール5世がシュマルカルデン戦争後、皇帝軍に内応したモーリッツに対しザクセン選帝侯叙任式を盛大に挙行し（1548年）、歴史家アブラ・イ・スーニガに戦勝を喧伝する書籍を刊行させ（1548年）、息子フェリペがネーデルラントを巡行した際には、各地でハプスブルク家の勝利と繁栄を祝する入市式を開催させたこと（1549年）等を指摘し、当時皇帝が、戦勝イメージの普及によって流動的な宗教情勢の安定化を図っていたと考察する。古代ローマの凱旋行列では敗軍の捕虜を連行するのが慣例であり、ティツィアーノの肖像画連作によって、疑似的な凱旋行列の再現を試みたカール5世は、そうした政治的動機から、捕虜姿のヨハン・フリードリヒの肖像画を注文したのではないかと推論する。

30年後、ルーカス・クラナハ（子）がヨハン・フリードリヒの名誉回復を図って制作した武装肖像画についても比較検討し、ティツィアーノの肖像画が同時代芸術家たちに与えた影響を総括した上で、発表を締めくくる。